

## ㊦ うそではありません

私が2つの小学校勤務のあと中学校に転勤したのは、昭和39年のことでした。以後は、小学校勤務の経験を生かしてよく分かる理科の授業を心がけました。このことは平成11年に上梓した「やっぱり理科は面白い」に書いたとおりです。

中学校には小学校と違った生徒指導上の問題がありました。「あんなに楽しく小学校生活を送っていた子どもたちが…」と驚くようなこともありました。しかし、当初体験した「荒れ」を全職員の力で克服したあとには、学習に運動に真剣に取り組み、成果をあげていく生徒の姿がありました。

ある日の放課後、私は、理科室で体内のニコチン残留の様子を知ることができるという試験紙を作っていました。禁煙を始めたばかりの私です。

「もうぼつぼつ消えたかな。どんなものだろう、調べてみよう」と思ったのです。

そのとき、ある生徒がやって来ました。疑うのはよくありませんが、ひょっとしたら吸ってるかも…と思っていた生徒です。

「先生、何してるの？」

「先生は、たばこを止めたやろ。止めても、ニコチンが残っているらしいから、今の状態を調べてみようと思ってな。ほれ、先生がなめると茶色になるやろう」

「先生、私にも1枚頂戴。私やったらそんなことないね」  
彼女は、私が渡した1枚をなめてみました。

「先生、こんなにきれいやわ。うちの学校にたばこ吸う子いやへんもんな。先生も吸うたらあかんで」

そんなことがあって、たばこを吸う生徒がいないというのは、私たちの自慢の1つになりました。

しかし、他校の先生からは、

「そんな筈はない。先生たちが見落としているだけでしょう」

「しっかりと生徒を見つめていないのと違いますか」

などと言われました。

3年生を卒業させた後、私は同学年を担当した若い先生たち（大学を卒業してそう多くの年数を過ぎていない彼らは、少々煙たがられる学年主任という職名をもった私と違って、生徒が親しく話しかけてくる先生でした）に、中学生だったときの様子を聞いてもらうことにしました。今だったらほんとうの様子を聞くことができるんじゃないかと思ったのです。

数日後、報告を聞きました。それは、

「先生、それはなかったですよ。信じてください」

「前の学校では吸ってたという奴もいましたがね。この学校に来て禁煙したって言うんですよ」

というものでした。

ずっところだった訳ではありません。トイレで吸殻が見つかり、指導方法を考えたことがありました。修学旅行中に煙のあがった部屋を見つけ厳しい指導をしたこともありました。けれども、それは一時的なものであり、煙草と縁のない状態が長く続きました。うれしいことでした。そんな指導に頭を痛めることがなかった私たちは、ほんとうに楽しい学校生活をさせてやることに力を注ぎました。夏休み中の登校日もそうでした。出席を点検し、諸注意をして、「残った10日間で宿題をちゃんとやってくるように」と話して終わりにする、という学年登校日に少し工夫を加えました。

それは、学年水泳大会をすることでした。みんなが楽しく遊び思い出に残る日にしたいと、種目を考えました。生徒に考えさせるのも1つの方法ですが、この年、私たちは「楽しい水泳大会」を生徒にプレゼントしようと考えたのです。

「泳いではいけない。25メートルを歩く」という競争は水泳が苦手な子どもたちを喜ばせました。「プールの底に横たわる時間を競う」というゲームは、どうしても浮かないんだという金槌の生徒のための競技でした。「プールにまいた基石を拾い集める競争」では入り乱れて水にもぐりました。拾った石の数が学級の得点になります。「水中ジャンケン勝ち抜き大会」では、泳げない子が「先生、浮いてしまうよ」と大騒ぎでした。

仰々しく閉会式を行いました。優勝したクラスはカルピスを飲み放題、これが賞品でした。それは3人の担任が家から持ち寄ったカルピスを溶かし、生駒の町まで行って買ってきた氷を放り込んだものでした。

「いいなあ」「ぼくらももうちょっとやったのに」  
うらやましそうに見ていました。

「飲み放題だぞ。他のクラスに残らないように全部飲めよ」  
とけしかける先生たちに子どもたちのブーイングが聞こえました。

私たちは、たくさん準備していました。最後のクラスが飲み終わっても、まだまだ原料は残っていました。生徒たちは「先生、ごちそうさまでした」と帰って行きました。

このほかにも、夜に登校させ、野外炊事やキャンプファイアをしたり、肝試し大会をしたりしたこともありました。これらは、夏の日の楽しい思い出であり、「荒れ」が忍び寄る隙を与えない1つの取り組みであったと思います。